

契丹語解読方法論序説

『長田夏樹論述集（下）』第29章
（原載：『内陸アジア言語の研究』I, 1984年3月）

この論文は、①序文、②契丹大小二文字の形状、③中陵墓室哀冊の筆写と考証、④東西二陵出土の哀冊碑石、⑤契丹哀冊の釈義と資料の集成、⑥契丹大字の発見と紹介、⑦解読方法の模索、⑧小字資料の出土と研究の進展、⑨錦西西弧山出土の蕭孝忠墓誌、⑩大字資料の出土とその研究、⑪許王墓誌の出土とその研究、⑫附表I 許王墓誌試読、⑬附表II、からなる。

①から⑨は契丹文字の研究史となっており、契丹小字の解読にとって重要な指摘がなされた。契丹文字研究小組「關於契丹小字研究」（『内蒙古大学学报』1977/4, 契丹小字研究專号）は、契丹小字で表記された借用漢語の漢語音に着目しその漢語音から小字の音価を推定するという“解読の手続き”を組織的に利用して解読を大きく進めたわけであるが、この手続き自体がいつ発見・利用されたかという問題につき、長田氏は山路廣明「契丹大字考」（『浮田和民博士記念史學論文集』（六甲書房, 1943）とシャフクノフ「契丹・女真小字釈読問題」（『東方銘辞学』15, 1963. 筆者未見）を紹介しこれらを解読史の中に位置づけた。

⑩では、契丹大字碑文の蕭孝忠墓誌と北大王墓誌の中に見られる紀年につき、長田氏自身の解読案を既存の解読案と併記して提示する。この部分は2001年の新版に収める際に改定が為されているので注意が必要である。紀年には干支が利用されるわけであるが、五行（木火土金水）十二獸とする説、五金（錫銅金銀鉄）十二獸、五色（青赤黄白黒）十二獸などとする説がある。長田氏は、五行を示す女真文字と契丹大字とが類似するとして五行説に立つ。五色説は即實「天干語義解」（『謎林問徑—契丹小字解讀新程』遼寧民族出版社, 1996）などにみえる。劉鳳翥「最近20年來的契丹文字研究概況」（『燕京学報』2001/11）は、五行説・五色説など諸説入り乱れて定まらないため暫くは甲乙などの天干によるとする。

⑪⑫は、1970年に発見された契丹小字碑文「許王墓誌」についての論考である。長田氏は墓主を耶律幹特刺とし『遼史』に拠りその経歴を詳しく紹介する。この説は、王弘力「契丹小字墓誌研究」（『民族語文』1986/4）で紹介され定説となり現在にいたっている。さて、⑫は許王墓誌の既存の考釈を利用し、それに長田氏の私案になる音価を付したものであるが、その子音文字の扱いに特徴がある。前掲契丹文字研究小組1977は、子音文字を $k'(a)$, $\eta(a)$, $t'(a)$, $s(a)$ などとし、契丹語を表記する場合 $[a]$ を帯びるとした。これは特定の母音との結合を認めない説といえよう。それに対して長田氏は $x(a)$, $ng(y)$, $t(u)$, $s(e)$ などのようにそれぞれ

の子音に特定の母音との結合を想定する。その後、契丹文字研究小組 1977 の考え方は、高路加「契丹小字複数符号探索」(『内蒙古大学学报』1988/2)、清格爾泰「契丹語数詞及契丹小字拼讀法」(『阿爾泰学報』7, 1997) へと展開し、子音文字が二つ以上列なる場合それぞれ母音[a]を帯び、他の母音と連用される場合、子音文字は同類の母音を帯びるとした。例えば m-sa-ai は masai (契丹語の『第一』) となる。これもやはり特定の母音との結合を認めない方向のものである。なお中村雅之「表音文字の配列」(『KOTONOHA』72, 2008) は、ウイグル文字の用法と同様に、固有の契丹語では母音が十分に表記されなかったとする。いずれにしても、特定の母音との連結を認めるか或いは認めないかという大きな二つの方向があり、長田氏の説は前者を代表したものといえよう。 (吉池孝一)